

平泉柳之御所跡研究の現在

入間田 宣 夫

-
- | | |
|-------------------|------------------------|
| はじめに | 3. 平泉館・加羅御所・無量光院の三点セット |
| 1. 堀の内・外の居住者をめぐって | 4. 都市平泉の鎮守をめぐって |
| 2. 認識の変更を迫られる | むすびにかえて |
-

論文要旨

北上川遊水地ならびに国道4号線バイパスの工事ともなう平泉柳之御所跡遺跡の発掘・調査は、「北方の王者」藤原秀衡のくらしぶりを甦らせる遺構・遺物の一端を検出することによって、学界内外に大きな反響を呼び起こした。遺跡の保存・整備をもとめる世論の高まりを作り出した。そればかりではない。保存運動のとりくみのなかで、数多くの研究発表がなされ、シンポジウムがくりかえされるなどのことがあった。そして、研究の飛躍的な発展がもたらされることがあった。

遺跡の保存が決定されて、運動が一段落をみることになった現在、この辺りで、百花斉放・百家争鳴ともいうべき研究の状況を整理しておくに越したことはない。今後の展望を明らかにするためにも、それが必要である。そのような整理の作業の一例を、小論において試みることにしたい。

そのさいに、取り上げるべきポイントは少なくない。だが、紙数には限りがある。ここでは、若干のポイントに絞って、作業を進めることにならざるをえない。堀の内・外の居住者をめぐって／平泉館・加羅御所・無量光院の3点セット／都市平泉の鎮守をめぐって、などのポイントがそれである。

はじめに

北上川遊水地ならびに国道4号線バイパスの工事にともなう平泉「柳之御所跡」遺跡の発掘・調査は、昨秋(1993年)をもって、予定の期間(6年間)を満了し、その幕を閉じることになった。発掘・調査を終えて早速に工事にとりかかるといふ当初の計画は、遺跡の保存をもとめる世論の高まりによって変更されて、堤防とバイパスの路線を見直す、したがって川道そのものを動かすという画期的な措置が採られることになった。遺跡の保存・整備を進めて行くうえで不可欠の国指定の手続きは、今秋に行われる予定とされている。それに向けて、準備が進行中のよしである。

そのうえで、いかなる保存・整備のプランが構想され、どのような調査・研究の態勢が組み立てられるべきであろうか。それが当面の問題になっている。

この間における遺跡保存運動のとりくみについては、大石直正「平泉柳之御所跡の保存運動」(『歴史評論』515号, 1993年3月), 菅野文夫「柳之御所跡の保存決定によせて」(『歴史学研究』657号, 1994年4月), 岡田清一「続・柳之御所遺跡の保存をめぐる」(『国史学』153号, 同年5月), 高島緑雄「柳之御所跡の保存運動—東京からの記録と感慨—」(『歴史手帖』22巻7号, 1994年7月)などによって総括的な叙述がなされている。岡田氏のそれには、関連の年表も付されており、詳細を極めている。

保存運動のとりくみにさいしては、度重なるシンポジウム・フォーラムなどが企画されて、発掘調査の進展に即応する研究の飛躍的な発展がもたらされることになった。その成果の一端は、平泉文化研究会の編集による『奥州藤原氏と柳之御所跡』(吉川弘文館, 1992年4月), 『日本史の中の柳之御所跡』(同, 1993年7月)などに示されている。

「保存運動が同時に歴史研究でもある」(大石)という特徴的なとりくみのなかから生み出された色彩豊かな具体的な歴史像の提示は、多くの研究者のまなざしを平泉に集中させることになった。そればかりではない。マスコミによって流布されることによって、広範な市民の関心をよびおこし、遺跡の保存をもとめる世論をより一層に高める。そのような役割をはたすことになった。

度重なるシンポジウム・フォーラムなどが企画され、数多くの口頭発表、そして数多くの論文発表が行われる、しかも発掘調査の進展によって新しい情報が相次いでもたらされるという経過においては、いかなる研究者といえども、自説を維持することが困難であった。その時点における情報にもとづいて、仮説を提示する以外にはない。近い将来における変更はやむをえない。そういう覚悟だったのである。遺跡の破壊という緊迫した情勢がなかったならば、発掘調査が終了して報告書が公刊されるのを待つという慎重な姿勢に安住することができたかもしれないのだが。

したがって、初めの段階において発表された見解には、訂正すべき多くの問題点が孕まれるこ

とになった。たとえば、「都市における生活空間の史的研究」の研究会（1989年10月、歴史民俗博物館）において発表させていただいた入間田「柳の御所の発掘と平泉の都市空間」、同じく歴史学研究会連続講座「文化財と歴史学」（歴研アカデミー）において発表させていただいた同「平泉藤原氏と柳御所の発掘」（1989年12月東京、のちに歴史学研究会編『遺跡が消える』1991年9月青木書に収録）など、自分なりの歴史像の提示には、柳之御所跡遺跡の居住者に秀衡ばかりではなく清衡・基衡までを含めて考えるなどの誤りが存在していた。

そればかりではない。研究の日進月歩の反面において、百家争鳴の状態が生まれ、さまざまな見解が錯綜するなかで、見通しが困難になるという事態が現出される。そのようなことにもなってきた。

この辺りで、議論の経過を整理しておくに越したことはない。保存運動が一段落を見て、新しい局面に遭遇することになった現在の機会に、保存運動の総括的な叙述とならんで、「研究運動」について、その主要な流れに即して、振り返って見る叙述の試みが行われたとしても、決して無駄にはなるまい。研究の今後の発展にとって、少しは役に立つことができるかもしれない。

1. 堀の内・外の居住者をめぐって

発掘調査が始められて間もなく、北上川岸の台地の先端部を区画する長大な空堀が姿を現した。南隣の加羅御所から堀を渡って来る木橋の脚材が出現した。空堀に囲まれた台地の平坦面からは、多数の掘立柱建物跡が検出された。縦板の塀によって囲まれた中核部分には、寝殿造を想わせる建物や園池の跡が確かめられた。中国産の白磁、手づくねのかわらけ、杉板の折敷などの遺物によっても、京都貴族のそれに匹敵する華やかなくらしぶりがあったことが推察された。そればかりではない。大量のかわらけと折敷の取合わせからは、儀礼空間における宴会の盛行が想定された。そのうえに、秀衡の息子や郎党に衣服を支給するためのリスト（「人々給絹日記」）を墨書した折敷までもが出土したのである。

そして、空堀から外れた台地の基底部、すなわち高館の丘陵部に連なる台地の平坦面からは、西方の金色堂に向かう道路が姿を現した。道路の北側には、溝によって区画された屋敷群（3～4）の跡を想わせる遺構が姿を現した。高級住宅団地を想わせる景観であった。それぞれの区画の内部からは、掘立柱建物跡や白磁・かわらけ、渥美・常滑産の陶器などが検出された。豪華な日常生活のありさまを暗示させる遺物の数々であった。

このような発掘調査の成果によって、文献史学の研究者は巨大な衝撃を与えられることになった。それによって、『吾妻鏡』などの文献の読みを根底から改めて、新しいレベルの読み方を模索する必要を痛感させられることになった。真剣な討論が交わされることになった。

空堀に囲まれた台地先端部の遺構を藤原秀衡の「平泉館^{なま}」、すなわち秀衡の政庁とする考え方が形成されたのは、そのような反省の最中においてであった。そして、高館に連なる台地平坦部

の遺構を秀衡の息子たち（国衡・隆衡ら）の家宅群とする判断が関連してかたちづくられることになったのも、同時であった。

『吾妻鏡』の記事によれば（文治5年9月17日条），秀衡の「平泉館」は金色堂の正方（東方），無量光院の北方に位置していた。秀衡の息子たちの家宅群は平泉館の西木戸を出た辺りに立ちならんでいた。そして，加羅御所すなわち秀衡の常居所は，無量光院東門の一郭に構えられていた。この記事に示された位置関係を読み解くのに，新たなる目くばりをもってするならば，秀衡の平泉館は堀内の遺構にあたるということにならざるをえない。そして秀衡の息子たちの家宅群は堀外の遺構に違いない。さらには，清衡・基衡の宿館も当然，同じく堀内の位置にあったに違いない。多くの文献史家が，そのように確信することになったのである。まことに然るべき成り行きであった。

このような共通認識の大枠がかたちづくられたことの意義は大きい。討論を活性化するうえでの土台ができたのである。そして，柳之御所跡遺跡の全体的な保存を世論に訴えるための基礎ができたのである。

1992年12月に開催された平泉遺跡群発掘調査指導委員会において，委員長藤島亥治郎氏によって発せられた「柳之御所跡は平泉館なり」という断言は，遺跡保存の方途を模索中の関係者にたいして，最後の決断を迫るものになった。この最終段階における藤島氏の獅子吼がなかったならば，保存の決断はそれほどスムーズに行われることができなかつたかもしれない。遑ていうならば，平泉館についての共通認識の大枠がかたちづくられることがなかつたならば，藤島氏の獅子吼はそれほど大きなインパクトを及ぼすことがありえなかつた。そうに違いない。

大石直正「平泉館の構造」（『国史学』143号，1991年3月），斉藤利男『平泉—よみがえる中世都市—』（岩波新書，1992年2月），平泉文化研究会『奥州藤原氏と柳之御所跡』（前掲）などに示された研究成果には，そのような平泉館についての共通認識の大枠が色鮮かに提示されていた。平泉文化研究会ほかによる『第1回平泉シンポジウム—古都平泉の実像をさぐる—』における討論のにさいしても，そのような基調がくっきりと反映されていた（1991年2月平泉，その内容については遅れ馳せながら近未来に公刊の予定）。

この時期に，自分なりに考え発言してきた内容についてみても，その共通認識の大枠を出るものではなかつた。たとえば，前記の小論のほかにも，入間田「平泉館はベースキャンプだった」（『歴史手帖』19巻7号，1991年7月）などがそれである。

2. 認識の変更を迫られる

しかしながら，堀の内・外の居住者に関して，共通認識の大枠に安住していられたのは，ほんのわずかの期間だけであった。発掘調査の進展によって新しい情報がつぎつぎにもたらされ，認識のやり直しを迫られることになったのである。

たとえば、遺跡の年代について。初めは12世紀の全期間にわたるような判断が示されていた。それが、京都風の手づくねかわらけの様式、折敷の材質の年輪などを精密に観察することによって、12世紀の後半、すなわち第3四半期から第4四半期なりという判断に進化させられることになった。そのうえで、第3四半期の遺物をもっとも多く残されていることが指摘されている。

とするならば、堀内の遺構の年代は秀衡以前の時期にまで遡ることはありえない。秀衡の政庁が営まれる以前に、清衡や基衡の政庁が営まれていたとする漠然とした予想は成立する余地がないことが明かになった。それならば、清衡や基衡の時期の政庁は何処にあったというのか。新しい問題が提起されて、にぎやかな議論を巻き起こすことになった（ここまでの経過については、入間田「平泉柳の御所の発掘と文献史学」『宮城歴史科学研究』34号、1992年5月において整理することがあった）。

平泉研究会ほかによる『第2回平泉シンポジウムー日本史の中の柳之御所跡ー』（1992年6月）においては、そのような認識の変更がくっきりと反映されていた（のちに平泉文化研究会編『日本史の中の柳之御所跡』1993年7月にまとめられる）。そのうち、五味文彦「吾妻鏡と平泉」の報告においては、清衡と中尊寺、基衡と毛越寺、秀衡と無量光院という対応関係に即して、それぞれの宿館のありかを考えるべしという問題提起がなされていた。金丸義一「寝殿造と水辺」の報告においても、毛越寺の東ならびに位置する観自在王院跡を基衡の邸宅に当てる考えが表明されていた。討論においても、義江彰夫・斉藤利男らの諸氏によって、さまざまな可能性が指摘されている。そして、今日にいたるまで、さまざまな可能性の指摘は絶えることなく、ホットな状態が継続している。たとえば、今年（1994年）6月に開催のシンポジウム「11～12世紀・みちのくの世界ー平泉、衣川、骨寺にみる人と物の流れー」（北上川流域の歴史と文化を考える会）においても、義江氏による講演「都市平泉の成立」があり、清衡の私第を観自在王院跡に、同じく清衡の宿館（政庁）を無量光院跡に比定する新説が提起されて、大きな議論を呼んでいる。そういえば、菅野成寛氏によっても、清衡・基衡の居所を無量光院跡なりとする説が提起されることがあった（1992年3月北上川の会主催シンポジウムの報告「平泉ーその宗教と都市構造ー」）。

堀内の遺構は政庁といっても、秀衡の時期のそれに限られることが明確になった。この認識の変更によって、安定した一時期が限定されて、それなりの落ち着きにいたったかに想われた。だが、そのようには行かなかった。12世紀の後半、すなわち秀衡の時期といっても平坦かつ一様ではない。その間に、堀や溝の区画を改変するような大きな工事があったことが、すなわち大きな断層があったことが、発掘調査のより一層の進展によって浮び上がってきたのである。その大きな工事によって、無量光院や加羅御所の軸線方向と連係する平泉館の区画の改変が行われたことが明瞭になってきた。それには、建物のたてかえなども伴っていたようだ。

この改変工事の意味するところは何処に。無量光院や加羅御所の造営にともなう都市計画（いわゆる秀衡地割り）の施行によるものであったのか。それとも、嘉応2年（1170）の鎮守府將軍就任にかかわるものであったのか。難しいことになってきた。

最近に発表された岡田清一氏の論文「基成から秀衡へ」(『古代文化』45巻9号, 1993年)にいたっては、12世紀第3四半期における平泉館の主人公は藤原基成だったという衝撃的な結論にまで及んでいる。陸奥守の経歴を誇る秀衡の岳父こそが、平泉館の主人公に相応しい。それを秀衡が継承するのは、鎮守府將軍就任を画期とするものだというのである。これには反論が予想されないではない。しかし、重要な問題が提起された。そのことに間違いはない。

現在の段階において確実に言えることは、12世紀の第4四半期、すなわち大きな改変工事が行われた以後の時期に、平泉館の主人公だった人物は、秀衡のほかにはいない。それを泰衡が継承した。そのことだけであろうか、初期の共通認識の大枠がぎりぎりの最後の線でかろうじて保たれている。そのようなことが言えるであろうか。

ただし、それにしても、不安が残らないでもない。その秀衡の時期の後半(第4四半期)に属する遺構・遺物が多く残されていないのである。平泉館が滅亡したさいの火災を想わせる痕跡にも乏しい。秀衡の晩年から泰衡の滅亡の時期にかけて、平泉館ではどのようなことが起きていたのであろうか。それについては、今後における発掘調査の進展を待つしかない。

堀外の台地の遺構についても、認識の変更を迫られることがあった。この遺構の年代が12世紀の後半に属することは、堀内の平泉館と変りがない。しかし、区画溝に囲まれた住宅団地風の景観、すなわち秀衡の息子たちの家宅群を想わせる景観が存在していたのは、無量光院・加羅御所・平泉館のそれに連動する改変の工事が行われる以前の時期に限定されるということが明らかにされた。改変工事の以後には、区画溝が埋められてしまっているのである。4つの区画をまとめて一体化する措置が取られているのである(道路は残されている)。秀衡の息子たちの家宅群はどうなったのであろうか。区画溝が埋められても、建物群は存在し続けたということであったか。そうしないと、『吾妻鏡』の記事に合致しない。それとも、かれらの家宅は平泉館の西木戸の辺りに……とする『吾妻鏡』の読みに、反省すべき問題が胚胎していたということであったか。これまた、難しいことになってきた。

そればかりではない。区画溝に囲まれた住宅団地風の景観それ自体についても、秀衡の息子たちの家宅群とするには都合の悪い部分があることが浮かび上がってきた。4つの区画のうち、大型の建物が存在していたのは2区画のみ。しかも、高館山に接近するそれには、祭祀に用いる特別のかわらけ(高台がつく)や常滑の広口瓶が伴っている。なんらかの宗教的施設があったに違いない(区画をなくして一体化する工事が行われた後には、より一層に宗教的な色彩を強めた建物が存在した。柱状高台のかわらけの大量出土によって、それが知られる)。どのように考えても、4つの区画のすべてを家宅とすることはできないのである。あらためて、慎重に考えて見なければならぬ。

現在の段階において、堀外の居住者について確実に言えることは極めてすくない。すべては、今後の発掘調査の進展にかかっている。

3. 平泉館・加羅御所・無量光院の3点セット

柳之御所跡遺跡の堀の内・外の居住者をだれに当てるのかという問題については、発掘調査の進展による遺構・遺物の編年を受けとめるシビアな議論がなされてきた。だが、そればかりではない。京都・鎌倉などの中央都市、多賀城・胆沢城などの地方都市、さらには厨川柵・鳥海柵などの安倍氏の柵に注目し、比較・対照することによって、遺跡の性格を明かにし、さらには平泉の都市論を組み立てるといふ冒険にあふれる議論もまた、今回のとりくみを特徴づける大きな要因をなしていたのである。

第一回の平泉シンポジウムについて、石井進「源氏の都、鎌倉」、高橋昌明「平氏の館—六波羅・西八条・九条末—」などの報告が行われたことは、そのなによりもの証明であった。京都・鎌倉の都市論を視野に入れなければ、平泉の議論はできない。反対に、平泉の発掘調査の成果を踏まえなければ、京都・鎌倉の都市論には豊かな発展を望めない。京都・鎌倉の近代化によって失われてしまった「御所」や「館」の遺構を復元するには、平泉に残されたその調査結果に頼るしかない。このような関連が浮き彫りにされるにいたったのである。

平泉館・加羅御所・無量光院の3点セット、すなわち北上川や猫間が淵の水面に囲まれた特異な都市景観については、「鳥羽の水閣」における御所と御堂のセット、すなわち京都の鳥羽離宮のそれを倣ったものだとする認識がかたちづくられている。齊藤利男『平泉』（前掲）によって前面に押し出され、多くの研究者によって注目されることになってた認識である。都市平泉の新しい歴史像を構築するうえで、この認識の押し出しが決定的な役割をはたすことになった。このことは改めて強調するまでもない。

これらの3点セットのうち、無量光院は秀衡による日想観の場所、すなわち池の中島の拝所から本尊の後方の金鶏山に没する夕日を観じて阿弥陀浄土への往生を想う特別の伽藍であった。そのことが、菅野成寛「平泉無量光院考—思想と方位に関する試論—」（『岩手史学研究』74号、1991年1月、のちに「都市平泉の宗教構造」として『奥州藤原氏と柳之御所跡』前掲に再録）によって明かにされている。その無量光院の東門の一郭に設定された加羅御所は、池の中島に準ずる第2の拝所ということにならざるをえない。加羅御所の側からすれば、無量光院の池の中島から本尊、そして金鶏山を経て、西方の浄土に向かう阿弥陀信仰の軸線が伸びていた。そのようなことにもなるうか。

それにたいして、平泉館の側からは、西方の金色堂、すなわち「生身往生」をはたした清衡・基衡のおわす阿弥陀堂に向かう軸線が伸びていた。菅野成寛「中尊寺金色堂の諸問題」（同71・72号、1988・89年）によって解明されている通りである。平泉館の位置を、金色堂の正方なりとする『吾妻鏡』の記事の通りである。発掘調査によっても、平泉館を出て金色堂に向かう堀外の大道が検出されている。

「金色堂－平泉館・無量光院－加羅御所」という政教の四極構造の方位（菅野），すなわち西方を志向する2本の軸線によってかたちづくられた都市平泉のプランは，平安京などに体现された古代中国の都市プランとは全く異質の存在であった。このような新しい都市プランが列島の一角に創出されることになった意味はかぎりなく大きい。高橋富雄・三浦謙一・入間田編『奥州藤原氏と平泉』（河出書房新社，1993年7月）における復元画（板垣真誠作製）などは専ら，このような軸線の理解に依拠したものであった。

3点セットの中核は平泉館である。その平泉館にたいしては，いかなる歴史的な位置づけが付与されるべきであろうか。川岸を見下ろす台地を長大な空堀で取り囲むというその立地のありかたについては，大石直正「平泉館の構造」（前掲），同「奥州藤原氏研究と柳之御所跡」（『奥州藤原氏と柳之御所跡』前掲）などによって，厨川柵・鳥海柵などのそれとの比較がなされている。安倍・清原など，北奥羽の軍事首長の城柵との類似が指摘されている。同じく，入間田「平泉館はベースキャンプだった」（前掲）などは，一族・郎党が集住するという堀の内外の景観に着目して，そのような軍事的緊張にあふれる宿営都市の景観は，安倍・清原から平泉に継承され，さらには鎌倉まで継承されることになると主張した。そればかりではない。金色堂に向かう先祖崇拜の軸線についても，鎌倉における法華堂（頼朝墓堂）－幕府（将軍御所）－南御堂（勝長寿院，義朝墓堂）というラインによって継承されることになった。そのことを主張した。

それにたいして，斉藤『平泉』（前掲）においては，胆沢城などの古代国家の地方政庁との類似が強調されている。堀なども胆沢城のそれに倣ったものとされている。岡田清一「基成から秀衡へ」（前掲）においても，平泉館のはじめの居住者を陸奥守の基成と見る立場から，同趣旨の指摘がなされている。政庁の機能や建物にかぎっていえば，確かに，そういう側面があったかもしれない。

熊谷公男「古代史からみた柳之御所跡－古代城柵との比較を中心として－」（『歴史手帖』20巻10号，1992年10月）では，台地・堀からなる立地のありかたや一族集住の形態については安倍・清原からの継承が。儀礼の場としての政庁の設定については多賀城・胆沢城からの継承が。それぞれに想定されている。「一族集住の場に政庁が取り込まれたものと解される」という印象的なコメントが記されていた。それが，真実に近いかもしれない。

同じく，菅野文夫「平泉の幕府」（同）においても，「平泉館は，北奥の豪族城館や鎮守府などの古代城柵とも異なる新しいタイプの宿館だと推測している。部分的には豪族居館や古代城柵の要素を継承しているかもしれないが，むしろそれと断絶していることに意味がある建物のはずである」とする指摘がなされていた。それも，そうかもしれない。

3点セットからなる特異な都市景観の全体については共通の認識が存在したにしても，あるいはまた2本の軸線からなる都市プランのありかたについては共通の理解が成立していたにしても，平泉館の歴史的な位置づけ，その立地や一族集住のありかた，それに政庁のルーツなど，個々の具体的な問題点になれば，意外なほどに大きな見解のズレがあって，容易なことでは共通の認識

に到達しがたい。そのような状況が見られたのであった。

このような複雑な状況が突破されるためには、発掘調査の進展に頼るしかない。だが、それがまた難しい状況になっているのである。たとえば、平泉館の政庁の建物について、寝殿造風のそれとはいうものの、具体的な遺構がなかなか検出されないでいるのである。

寝殿造の対を描いたと思われる板絵（折敷墨書）については、川本重雄「寝殿造の絵画資料」（『奥州藤原氏と柳之御所跡』前掲）によって考察がなされている。だが、その遺構を示す柱穴などは見つかっていない。金丸義一「寝殿造と水辺」（『日本史の中の柳之御所跡』前掲）の指摘にもある通り、寝殿造建物の実在が証明されるためには、まだまだ調査が不十分の状態にあるといわざるをえない。

建物の瓦については、鎌田勉「柳之御所跡出土瓦からの一考察—平泉の瓦成立の系譜と年代及び使用形態について—」（『岩手県埋蔵文化財センター紀要』XIV, 1994年）による指摘がなされている。瓦と桧皮葺き使用の建築形式が京都から導入されるようになった画期は、秀衡による鎮守府將軍就任（1170年）ではなかったかというのである。板絵に描かれていたような寝殿造の建物の導入時期を特定することに通じる重要な指摘である。だが、そのような建物の遺構については依然として不明の状態なのである。

園池のありかたについても、何度かの改修工事があったことが判明しているものの、不明の部分が多く残されている。

平泉館を取り囲む堀にしても、改修工事のあったことが判明しているものの、厳密な時期の確定がなされているのとはいい難い。源頼朝の侵攻に備えるために設けられたかもしれないとする岡田清一「基成から秀衡へ」（前掲）の指摘を完全に退けるだけの厳密さには到達しているとは見なし難い。

現在までの調査区域について確実に言えることは、寝殿造の主屋の東西棟を想わせる遺構はまったく出土していない。すなわち若干の南北棟の建物の遺構が出土している。そのことだけであろうか。寝殿（主屋の東西棟）はあったのか。なかったのか。問題である。南北棟の建物の解釈についても、さまざまな解釈が予想される。寝殿造の対だったのか（それが政庁の建物になるのかどうか）。それとも鎌倉幕府の侍所（柱間が18か間の長大な建物）に連なる武家風の建築だったのか。自分なりの判断では、後者の武家風の説を採りたいのだが。いずれにせよ、難しいところである。

政庁とはいっても、その場所で、いかなる政治・儀礼が行われたのか。それについても、不明の部分が多く残されている。省帳・田文などの国衙行政の文書が存在した記録（『吾妻鏡』文治5年9月14日条）、かわらけ・折敷などの宴会を想わせる遺物の出土などから、なんらかの政治・儀礼の行われた場所という緩やかな判断がなされるにとどまっている。国衡・泰衡らの子弟・郎党らの人名を列記した「人々給絹日記」について考察した入間田「柳之御所跡出土の折敷墨書を読む」（『岩手県埋蔵文化財センター紀要』XI, 1991年3月、のちに『奥州藤原氏と柳之御所

跡』前掲に再録)にしても、かれらの列席した儀礼・宴会の想定にとどまっている。具体的には、なかなか分らない。京都風のそれであったのか。多賀城・胆沢城風のそれであったのか。それとも鎌倉幕府のそれに連なる武家風か。建物のありかたの判断ともかかわって、なかなか解決が付きそうにもない。園池のあたりの中心部から検出された井戸状の遺構は、なんらかの儀礼に関連するものかと指摘されている。堀に投げ捨てられた大量の木製品は、もの送りの風習に関連するものかという指摘が、現地説明会においてなされている。これらの可能性についても、より一層の究明が望まれるところである。

政庁の生活・機能を支えるための雑舎・工房群についても不明の点が多い。大石「平泉館の構造」(前掲)、同「奥州藤原氏研究と柳之御所跡」(前掲)、入間田「柳之御所跡出土の折敷墨書を読む」(前掲)などによって、織物・染色・裁縫・鍛冶・金工・塗物(漆)などの工房群と職人群との存在、すなわち巨大な家産経済を支える下部機構の存在が示唆されている。たしかに、それらしい遺物・遺構が出土している。「人々給絹日記」の折敷墨書のほかに、裁縫尺・糸巻き・鉋滓・金の溶解した礫・漆塗りの刷毛など……。それに、平泉館の中心部(堀の内)から外れた加羅御所に渡る木橋に近い南東の周縁部分には、職人が居住する雑舎群を想わせる無数の柱穴が検出されている。だが、それだけでは、十分とはいえない。より一層の調査が望まれるところである。

3点セットのうち、加羅御所については、発掘調査がほとんど行われていない。秀衡の常居所とされたその場所には、いかなる建物があり、どのような生活が営まれていたのであろうか。すべては、今後の発掘調査によるしかない。ただし、民家の建替えなどにもなっていた緊急発掘の調査によって、井戸跡から山水飛雁鏡が金銀蒔絵の箱に収められた状態で出土している。まったくの局所的な調査によっても、これだけの遺物が出土しているのである。国指定のうえて本格的な学術調査が行われることが望ましい。

同じく、3点セットのうち、無量光院については発掘調査が行われ、報告書が刊行されている(文化財保護委員会『無量光院跡』, 吉川弘文館, 1954年)。そして、菅野成寛氏の論考によって、池の中島において挙行された日想観の行いのありさまが、手に取るように鮮やかに再現されている。だが、問題がないわけではない。かわらけなどの遺物については、最近の発掘調査の成果に即して見直しを行う必要が生じている。土塁・堀などの遺構についても、柳之御所跡の遺構との関連において見直しの必要が生じている。そして、無量光院が建てられる以前に、清衡の宿館があったとする学説(義江ほか)が提起されている状況からすれば、発掘調査そのものの部分的なやり直しがもとめられる。そのようなことにもなるかもしれない。

4. 都市平泉の鎮守をめぐる

『吾妻鏡』文治5年9月17日条に引用された「寺塔已下注文」には、「鎮守事」として、「中

央惣社，東方日吉・白山両社，南方祇園社・王子諸社，西方北野天神・金峰山，北方今熊野・稲荷等社也，悉以模本社之儀」と記されていた。これらの鎮守をもって，都市平泉を結界して，穢・疫神・疫鬼などの侵入するのを防ぐ拠点なりと性格づけられたのは，斉藤利男『平泉』（前掲）によるものであった。その問題提起を受けとめて，京都・鎌倉，そして諸国の国府におけると同じような「四角四境祭」が，これらの鎮守において举行されていたとする認識が広がることになった。

それにたいして，五味文彦「吾妻鏡と平泉」は（第2回平泉シンポジウムの報告，のちに『日本史の中の柳之御所跡』前掲に収める），これらの鎮守の総体を都市平泉の鎮守なりと判断することはできないと指摘した。そのうえで，日吉・白山は無量光院の鎮守，王子・熊野は平泉館の鎮守，そして祇園・北野・稲荷などは都市平泉の鎮守なりとするべきことを示唆した。

この五味報告の反響は大きく，シンポジウムの会場においても，斉藤・義江の両氏による反論がなされるなどのことがあった。そして，現在においても，鎮守の場所の比定，鎮守の設定の時期などをめぐる活発な論戦が続けられている。

たとえば，前川佳代「平泉の鎮守」（『古代文化』45巻9号，1993年）においては，より一層に広範囲な都市領域を想定して，その東西南北の入口に鎮守を位置づける試みが行われている。その結果，東方鎮守の所在地は北上川対岸の長島地区にもとめられることになった。さらには，そのような東西南北の鎮守によって結界された都市領域そのものについても，鳥羽ではなく，白河周辺を真似たものとする新説がうみだされることになった。前川「衣関考—都市平泉の構想—」（角田文衛先生傘寿記念論集『古代世界の諸相』京都，1993年）においては，白河周辺との類似が地勢のうえから指摘されていた。その類似が，鎮守の配置によって裏づけられる。そのような主張になっているのである。

菅野成寛「都市平泉における鎮守成立試論—靈山神と都市神の勧請—」（『岩手史学研究』77号，1994年）においても，重要な問題が提起されている。鎮守のうち，今熊野と祇園社の勧請は，養和元年（1181）における秀衡の陸奥守補任を契機とするものであった。日吉・白山の靈山神については，中尊寺の鎮守として1160年代には勧請が行われていたが，都市の鎮守としての再勧請が行われたのは，同じく1180年代であった。などの指摘がなされている。後白河院の法住寺殿の近隣には，蓮華王院・蓮華王院惣社・今熊野社・新日吉社が造営されて，御堂と御所と神祇の複合空間が現出されていた。それを，秀衡は真似をしたというのである。ただし，これらの都市平泉の鎮守群を，現在の平泉における同名の神社に比定する作業については，「徒労に帰すとと思われる」という慎重な態度が表明されていた。そのうえで，無量光院と指呼の距離に所在する白山社域を，都市平泉の中央の惣社地であった可能性が指摘されている。

鎮守の性格，鎮守の比定地，鎮守の勧請された時期，いずれの問題についても，解決の困難な状況になっていることが知られよう。大変なことである。

鎮守の配置されたモデルについても，白河とする説（前川）と法住寺殿とする説（菅野）との

対立が浮かび上がってきた。最初に提起された齊藤説では、多賀城の陸奥国府における四方鎮守のモデルなどが想定されていたのだが。これまた、大変なことになってきた。

平泉と京都との関連ということに即して言えば、平氏館があった六波羅などに着目する説（高橋）、御所と御堂のセットからなる鳥羽の「水閣」に着目する説（齊藤）などがあって、にぎやかな議論が交わされてきた。そして、今度は、白河に着目する説（前川）、さらには法住寺殿に着目する説（菅野）の提起である。いよいよもって、にぎやかなことになってきた。

そればかりではない。平泉の都市論を受けとめて、京都や鎌倉についても新たな都市論を模索する動向が目だってきた。たとえば、野口実「頼朝以前の鎌倉」、元木泰雄「京の変容—聖域と暴力—」などがそれである。両者ともに、『古代文化』45巻9号（1993年）に掲載されている。同誌には、前川「平泉の鎮守」（前掲）、岡田「基成から秀衡へ」（前掲）なども掲載されていた。これらの論文が特掲されるにあたっては、「平泉、京都、鎌倉—平安末期都市史研究—」のタイトルが掲げられていた。これほどに、示唆的なことはない。

しかし、鎮守をめぐる議論ばかりが平泉の都市論の内容をなしていたかといえ、決してそうではない。いわゆる基衡地割・秀衡地割の問題、志羅山遺跡の位置づけ、高屋通りのメインストリートをめぐる問題、高館山の空堀をめぐる問題、衣川の対岸における商業地区のありかた、都市平泉の生活を支えた物流のありかたなど、議論すべき数多くの問題が横たわっている。

いわゆる基衡地割・秀衡地割の問題については、藤島玄治郎氏による早くからの指摘に発掘調査の成果を重ね合わせることによって、「平泉を歩く会」（地元の研究者・発掘調査担当者などによって構成される）の席上などにおいて、最近になって改めて話題にされることになったものである。その議論の一端は、松本建速「12世紀平泉の都市計画」（『歴史読本』38巻11号、1993年6月）において紹介されている。毛越寺・観自在王院など、都市平泉の西南の一角における地割、すなわち建物跡・溝跡・道路跡に示された軸線の方向性には、基衡の意志を想わせる一定の規格がともなっていた。それにたいして、平泉館・加羅御所・無量光院の3点セットからなる都市平泉の東方の一角における地割には、基衡のそれとは異なり、北向きの軸線を東方にずらした規格がともなっていた。それが、秀衡の意志によるものであることはいうまでもない。この二つの地割の存在ほどに、基衡から秀衡にいたる都市の拡大過程、都市プランの進化を明瞭に語ってくれるものはない。ただし、二つの地割について詳細な調査が行われているわけではない。それぞれの位置関係や時期関係の確定がなされるためには、多少の時間的な経過が必要であろうか。

志羅山遺跡は、毛越寺の東方、無量光院の南方にあたる居館跡である。その発掘現場の井戸跡から中国福建省産の白磁水注が出土したのは1993年1月のことであった。制作の年代は12世紀の後半期。しかも、完型品である。全国的にも珍しい発見である。それが、秀衡一族のくらしぶりを物語る遺物として、大々的に報道されたことはいうまでもない。そればかりではない。建物跡や溝跡などにも、秀衡の一族を想わせるに十分な堂々たるありさまが備えられていた。この居館跡に住まいした人物は、具体的には誰なのか。秀衡の息子のひとり、たとえば三男の忠衡か。そ

れとも樋爪（比爪）俊衡などの一族か。基衡地割のなかに設定された居館であるからには、基衡の関係者が住んでいた前史も予想される。だとすれば、誰がその居住者だったのか。あれも、これも、分からないことばかりである。いずれにしても、この遺跡の位置づけによっては、平泉の都市論に重大な影響が及ぼされることになりかねない。それほどに遺跡なのである。ただし、遺跡の調査は例によって十分に進んでいるわけではない。これからが大事である。なを、志羅山遺跡の西北、すなわち観自在王院の東隣にも、同じような居館跡があったことが地割などの観察によって浮び上がってきた。たとえば、本澤慎輔「12世紀平泉の都市景観の復元」（『古代文化』45巻9号、前掲）によって、その図面が紹介されている。この居館跡の主人についても、まったくの謎である。全ては、これからののである。

高屋通りのメインストリートについては、「寺塔已下注文」（『吾妻鏡』文治5年9月17日条）に記載はあるものの、実態は依然として不明の状態にある。高屋の表記に相応しい建物の構造はいかに（2階建か）。「観自在王院南大門南北路、於東西及数十町」と記されたその通り伸びる方向はいかに。志羅山遺跡のある東の方向か。それとも、「国衡館跡」「隆衡館跡」とよばれる舌状台地のある南の方向か。これもまた、謎である。いずれの方向にも、12世紀の遺構・遺物の一部が検出されている。だが、これが高屋だという、そのものズバリの遺構が発掘されるまでにはいたっていない。これからの調査に待つしかない（高屋通りをめぐる問題については、入間田「平泉柳の御所の発掘と文献史学」前掲において記述することがあった。あわせて参照していただければ、さいわいである）。

高館山の中腹において検出された12世紀の空堀については、北奥羽の高地性集落の堀に由来する防御施設なりとする理解が形成されつつあるようだ。同じような空堀は、花立の中腹からも検出されているようだ。高館や花立の高地は都市平泉を外敵の侵入から防衛するための砦または物見櫓のような役割をはたすことがあったのであろうか。このような理解が成り立つとするならば、これまでに平泉が専らにしてきた平和都市のイメージは改変の必要に迫られることになるかもしれない。そういえば、文献史学の方面からも、高館山を楯の防御施設があった高山、すなわち高楯山なりとする問題提起がなされていた。前川「高館残照」（『古代文化』45巻9号、前掲）によるものである。高館山をもって源義経の居所なりとする伝説とは完全に位相を異にする新説が形成される。そのようなことになっているのである。ただし、砦などの遺構が、発掘調査によって検出されているわけではない。義経居所の伝説を検証するために行われた過去における部分的な発掘調査では、12世紀の遺構が発見されなかったという経過がある。

衣川の対岸における商業地区のありかたについては、斉藤利男『平泉』（前掲）によって鮮やかに描き出され、多くの人びとの共感を誘うことになった。「境界の大商業地、衣河」のイメージには、もはや疑いを挟む余地なしという感じさえもが抱かれつつあるような状況である。だが、問題がないではない。そのような商業地区の存在を想わせる遺構・遺物が発見されていないのである。宿・六日市場・七日市場など、商業地区を推定する材料になった地名が、鎌倉期より以後

のそれであるということもあった。今後における発掘調査の進展によって、齊藤説の真実が証明されることが望まれている。齊藤説によれば、都市平泉の南の境界にも、祇園・三日町の商業地区があったとされている。こちらの方については、最近になって若干の発掘調査が行われ、大型の建物跡などが検出されている。それらの建物が商業地区の存在の証明になるのかどうか。気になるところである。

都市平泉の生活を支えた物流のありかたについては、中国産の白磁、東海地方の渥美・常滑産の陶器、北陸の珠洲産の陶器さらには平安京型かわらけなどに熱いまなざしが注がれ、活発な議論が展開されている。たとえば、矢部良明「世界から見た柳之御所跡」(平泉文化研究会編『奥州藤原氏と柳之御所跡』前掲)、同「中世陶器」(『講座日本荘園史』1, 吉川弘文館, 1989年)、同『日本陶磁の1万2千年』(平凡社, 1994年)、大石直正「奥州藤原氏研究と柳之御所跡」(『奥州藤原氏と柳之御所跡』前掲)、同「地域性と交通」(『岩波講座日本通史』7, 1993年)、小野正敏「中世みちのくの陶磁器と平泉」(平泉研究会編『日本史の中の柳之御所跡』前掲)、藤沼邦彦「石巻市水沼窯跡の再検討と平泉藤原氏」(『石巻の歴史』6, 石巻市, 1992年)、菅野成寛「平泉出土の国産・輸入陶磁器と宋版一切経の舶載—2代基衡と院近臣—」(岩手県平泉町教育委員会『柳之御所跡発掘調査報告書』1994年)などの文献を上げることができる。考古学プロパーの文献にいたっては枚挙にいとまがないありさまである。

平泉から渥美・常滑・珠洲, ないしは京都, さらには博多を経由して明州(寧波)にまでいたる物流のネットワークについて、菅野論文は記している。「この時代における, かかる洋上間の物流関係を立証しえたことは, 柳之御所跡発掘調査に見る最大の成果の一つといえるであろう」と。それには, まったくの同感である。日本史の中の柳之御所跡であったばかりではない。世界史の中の柳の御所でもあったのである。

それに関連して, 北上川水運の存在も大きくクローズアップされることになった。石巻から平泉まで, さらには平泉から津軽までにいたる物流の幹線ルートが存在が明確にされることになった。大石・藤沼・菅野論文などによるものである。

これらの陶磁器に大量のかわらけを加えた容器の組み合わせには, 京都には見られない, 平泉ならではの独自性が看取された。それについては, 小野論文において詳述されている。

かわらけについていえば, 平泉で制作された平安京型の手づくねのそれが, 北奥羽の浪岡城跡, 蓬田大館跡などに運ばれて行った政治的なルートについても着目されている。大石・藤沼論文や松本建速「柳之御所跡におけるかわらけ存在の意味」(『岩手県埋蔵文化財センター紀要』XII, 1992年)によるものである。

このような物流のありかたについての研究の進展は, 列島の歴史における, 東アジア世界の歴史における, 都市平泉の位置づけを明らかにするばかりではない。さらには, 奥州藤原氏による政治権力そのものの位置づけを解明することに通ずることになる。そうに違いない。これからが楽しみである。

むすびにかえて

それにつけても、柳之御所跡遺跡の全体的な保存が決定され、将来における継続的な発掘調査のための条件が確保されたことはさいわいであった。今回の発掘調査は堤防・バイパスに予定された工事区間に限っての緊急のそれであった。遺跡の全体において工事区間の占める割合は40パーセントを出るものではない。堀内にも、堀外にも、広大な未調査の部分が残されているのである。さらにいえば、工事区間内といえども、調査が完了したとはいえない。まだまだ、未解明の部分が残されているのである。

したがって、堀内についても、堀外についても、数多くの問題点に即して、発掘調査が継続して行われ、討論がくりかえされる。そのなかで、認識の深化がもたらされる。そのような態勢のくみたてが行われなければならない。

発掘調査の継続、遺構・遺物の保存・展示・活用、調査・研究のための公的な機関の設立、研究者や市民との交流の企画など。いずれをとっても、難しい問題ばかりである。諸方面の英知を結集したとりくみがもめられている。

柳之御所跡を離れて、加羅御所や志羅山遺跡、さらには高屋通りの方面については、発掘調査が部分的に行われているだけである。保存に向けた施策が講じられているわけでもない。多くの課題が山積されている状況である。衣川の対岸の「商業地区」や、祇園・三日町地区などにいたっては、ほとんど手つかずの状態にある。都市平泉の全体像を解明するためには、どれひとつとって、見過ごしにできる遺跡ではない。これまた、諸方面の英知を結集したとりくみが必要とされるところである。

これまでに紹介してきた発掘調査の経過については、2回の平泉シンポジウムにおける発掘調査担当者の報告、すなわち三浦謙一（岩手県埋蔵文化財センター）・八重樫忠郎（平泉町教育委員会）の両氏による報告から大いに学ぶことができた。第2回シンポジウムにおける報告については、『日本史の中の柳之御所跡』（前掲）に収録されている。参照していただきたい。三浦・八重樫の両氏ばかりではない。松本・本澤・熊谷など、それぞれの現場のスタッフには、公式・非公式、さまざまの機会を通じて、何度となく教えていただくことがあった。この場を借りて、御礼を申しあげる。

より一層に詳細な内容については、1988年から始まる各年次の調査終了にさいして行われた現地説明会の資料、同じく各年次の調査結果の報告・概報を参照していただきたい。ただし、岩手県埋蔵文化財センター（堀内の部分を担当、1988～93年）、岩手県平泉町教育委員会（堀外の部分を担当、1989～92年、ならびに遺跡全体の範囲確認調査の一部を分担、1993年）、岩手県教育委員会（遺跡全体の範囲確認調査を担当、1992～93年）という大がかりな態勢によって行われた6年間の発掘調査の成果を、それぞれの調査チームによる各年次の説明会資料（それぞれのチー

ムごとに作製)・報告(平泉町)・概報(埋文センター)などによって、総括的に理解することには、大きな困難をとまなわざるをえない。それぞれの調査チームによる成果の全体的なとりまとめ(報告書)が出揃わないことには、総括的な理解にいたることは困難である。平泉町教育委員会の報告書だけは今年3月に刊行されている。残る2チームによる報告書の刊行は今年の何月になることであろうか。待ち遠しい。そのような事情である。したがって、発掘調査の経過についての小論の紹介にも、多くの不備や誤解がともなっているに違いない。お許しをいただきたい。

なを、埋蔵文化財センターからは、毎年に関要が公刊されて、関連の論考が掲載されている(その一端は本文中で紹介した)。同じく、『柳之御所跡-姿を現した居館跡-』の図録(1991年3月)も公刊されている。あわせて、参照していただきたい。

(1994年8月4日)

(追記)

小論の執筆後、一年を経過した。この間にも、多くの論考が発表されている。たとえば、『歴史評論』535号(1994年11月)においては、「古代末・中世初期の東北日本」の特集が企画されて、大石直正・入間田「柳之御所の発掘・保存から考える」(対談)、菅野文男「柳之御所跡と平泉研究」、工藤清泰「古代末・中世初期の北奥」、本堂寿一「所謂蝦夷館から柳之御所まで」、八木光則「奥六郡・山本三郡の城と柵」、伊藤邦弘「遊佐荘と大楯遺跡」などの論考が掲載されている。佐藤信・五味文彦編『城と館を掘る・読む-古代から中世へ-』(山川出版社、1994年11月)には、大平聡「堀の系譜」、五味「館の社会とその変遷」などの論考が掲載されている。大平氏には、「都市平泉と奥州藤原氏」(『情況』2期6巻3号、1995年2月)の論考もあった。古代史の側からの研究史整理として、貴重である。

平泉館が金色堂の「正方」にあたるということについては、飯淵康一ほか「古代末期平泉に於ける方角認識」の発表があった(日本建築学会東北支部研究発表会記録、1995年6月)。入間田「中尊寺金色堂の視線」(羽下徳彦編『中世の地域社会と交流』吉川弘文館、1994年8月)も、それに関連したものである。

柳之御所跡の国指定については、今年5月に、文化財保護審議会の答申がなされた。官報による告示は今秋中になるものと見られる。この9月には、岩手県教育委員会の主催によって、「柳之御所遺跡整備検討委員会」の会合(第一回)が行われることになった。なお、岩手県埋蔵文化財センターほかによる発掘調査にかんする報告書は、今年度内に刊行の予定とされている。

Current Status of Research on the Hiraizumi-Yanaginogoshi Site

IRUMADA Nobuo

This paper concerns excavation and research of the Hiraizumi-Yanagi Palace Site, which has been implemented along with construction work on the Kitakami River Reservoir and National Highway-4 Bypass. Structural remains and artifacts from this site have shed light on the lifestyle of Hidehira Fujiwara, the so-called 'King of the North Country', and have generated great interest both inside and outside of academic circles. In addition, a strong public sentiment favoring preservation and restoration of this site has appeared. As part of the movement to preserve this site, numerous symposiums and academic meetings have been held, and research has been proceeding at a fast pace.

Currently, it has been officially decided that the site will be preserved, and the protest movement has quieted down accordingly. This is thus a good time to begin summarizing and analyzing the research results to date. Such a task is also vital for determining future directions as well. This research is designed as one attempt to contribute to this effort.

In summarizing and analyzing, there are numerous important aspects of the research which should be considered. As space here is limited, however, this paper focuses on the following three major points:

- * Residences inside and outside the moat
- * The Hiraizumi Structure, the Kara Palace and Muryokoin Temple
- * The Shinto guardian deity of the Hiraizumi urban area